＜研究論文＞

縄文時代における東京湾東沿岸地域の海進海退(4)

武　田　宗　久

Ⅴ　現東京湾東岸地域の貝塚分布（別表・付図17，18，19参照）

南 半 部

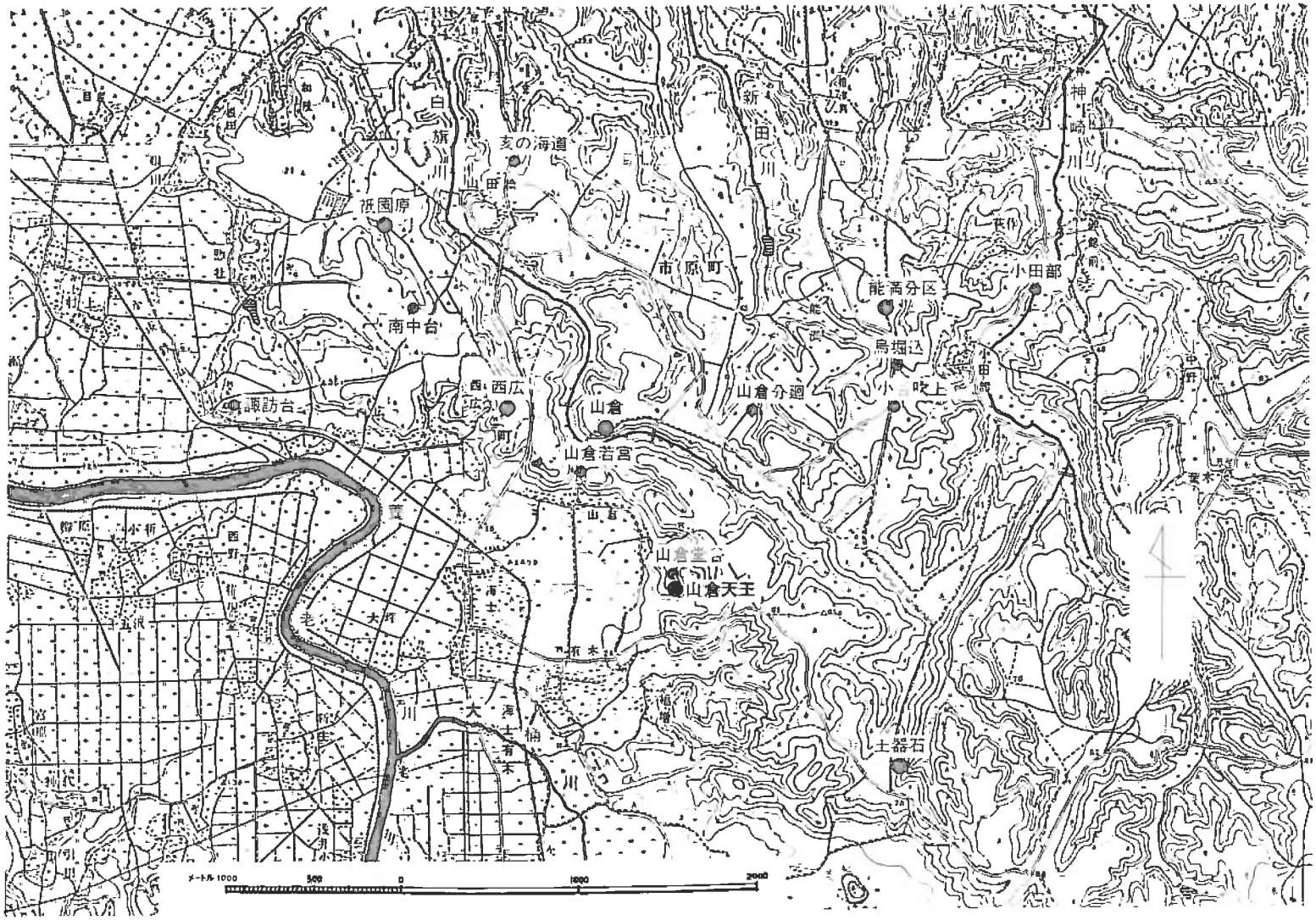
(1)　神崎川沿岸

この川は村田川の下流左岸に合流する比較的大きな支流で、中～下流域には貝塚は見当らず、上流左岸に面する縁辺台地に小田部・能満分区・烏堀込（からすほっこみ）・土器石（かわらけいし）の各貝塚と小谷吹上（こやつふきあげ）貝ブロック遺跡が散在する。

小田部貝塚は標高30ｍ前後、谷津田に面する小貝塚で、イボキサゴが多く、ハマグリ・シオフキ・ウミニナ・マガキ・アラムシロを含み、堀之内・加曽利Ｂ式を主とする。

能満分区・烏堀込・小谷吹上の３遺跡は神崎川の本流から西南方に入り込む支谷の最奥部にあって、後述する新田川の谷奥に挟まれたところに所在し、いずれも標高60ｍ前後である。このうち能満分区は大型の馬蹄形貝塚（東西150ｍ・南北130ｍ）で、ハマグリ・アサリ・ツメタガイ・サルボウ・オキシジミ・ハイガイ・シオフキ・アカニシ・イボキサゴ・ウミニナ・マガキ・バイなどを含み、加曽利ＥⅣ・称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ式期を中心とする中期末～後期の貝塚である。烏堀込は昭和60年に一部発掘された加曽利ＥⅡ・Ⅲ式を主体とする点在貝塚で、ハマグリ・イボキサゴが多く・アサリ・シオフキ・アカニシ・ウミニナ・アラムシロを含む（註１）。小谷吹上は遺物包含層が広く分布し、昭和53年の一部発掘では中期の竪穴住居址11・中期の土坑150が検出され、このうち加曽利Ｅ式期の住居址１軒にハマグリ・シオフキ・カキ・ウミニナを主とする貝ブロックが発見されたという（註２）。

土器石貝塚は神崎川の最奥部に位置する点在貝塚で、標高75～78ｍを測る。昭和30年代から知られていたが（註３）、昭和62年から平成元年にかけて、千葉県文化財センターが千葉県水道局による浄水場建設に伴う遺跡の発掘調査を実施した。その範囲は本貝塚の一部を含む周辺一帯48,000㎡で、その詳細な内容は公表されていない（平成３年２月現在）が、同センター発行の年報によると、先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良～平安時代にわたる豊富な遺構と遺物を包含する。このうち縄文時代の土器は草創期の夏島式から晩期終末の荒海式にいたるが、主体となるのは加曽利ＥⅢ式から加曽利ＢⅡ式までである。遺構は竪穴住居址に加曽利ＥⅢ～Ⅳ式期166・称名寺式期３・堀之内Ⅰ式期250・堀之内Ⅱ式期２・加曽利ＢⅠ～Ⅱ式期17、掘立柱建物跡に加曽利ＢⅠ～Ⅱ式期数軒、早期末葉の炉穴・各時期の土坑・埋甕等が多数検出された。右のうち加曽利ＥⅢ式期の成人男性人骨を伴う竪穴住居址と堀之内Ⅰ式期の竪穴住居址及び土坑に貝ブ



第１図　神崎川・新田川・白旗川上流と養老川右岸の貝塚・貝ブロック遺跡の分布図

ロック（貝の種類は未発表であるが多分鹹水産のものであろう）が発見された（註４）。

註１　市原市文化財センター『市原市文化財センター年報昭和60年度』昭和61年
註２　能満小田部線埋蔵文化財発掘調査団『小田部小谷吹上遺跡』昭和54年
註３　伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』昭和34年
註４　千葉県文化財センター『千葉県文化財センター年報』No. 13・14・15平成元年・２年

⑵　雁田川・新田川・北川・金杉川・白旗川沿岸

神崎川と東京湾に面する海岸平野に挟まれた洪積平野が市原台地（南半部は国分寺台とも呼ばれる）で、北部は標高15～20ｍであるが、南に行くにしたがって次第に高度を増し、養老川に面する所では50ｍに達するところがある。上記の諸川のうち、雁田川・北川・金杉川は海岸平野にある小規模な流れで、市原台地までは達していないが、新田川（しんでんがわ）と白旗川は市原台地を開析して樹枝状の谷を作る。

実信（さねのぶ）貝塚は雁田川から東方への延長線上にある沖積低地で標高約4.8ｍ背後にある市原台地の旧海蝕崖から約100ｍ前後を測る。この遺跡は千葉県文化財センターが昭和63年度に、千葉～木更津間の高速道路及び都市計画道路の建設に伴う遺跡調査の段階で発見したもので、平成２年に発掘した。貝塚の規模は東西約30ｍ南北約40ｍで、凸レンズ状に堆積する。同センターの年報によれば、縄文中～後期の焼貝ブロックが９基あり、遺物は中期後半～後期初頭・後期後半・晩期末葉の土器片及び石器があるとのことであるが、今後の詳細な報告をまって、本貝塚の立地する自然環境と遺跡の内容を慎重に検討したい（註１）。徳永貝塚と八幡神社貝塚は実信貝塚の南々東標高20ｍ前後の台地にある中乃至後期と思われる小貝塚であるが、内容は不明である。

新田川は中流で２股に分かれ、本流の上限に山倉分迴（やまくらぶんまわし）貝塚があり、少し降った支谷の右岸と神崎川の支谷に挟まれた台地に先述した能満分区・烏堀込の各貝塚と小谷吹上貝ブロック遺跡がある。また中流域で分岐した支谷の左岸に門前貝塚がある。このうち山倉分迴は標高約45ｍを測る。イボキサゴ・ハマグリ・アサリ・ツメタガイ・サルボウ・シオフキ等を含む小貝塚で、昭和24年の発掘報告によると、勝坂・加曽利Ｅ式期で、周辺に包含層が広く分布するという（註２）。門前は標高約20ｍ、ハマグリ・イボキサゴ・サルボウ・アカニシ・アサリ・ツメタガイ・マガキ・カガミガイ等を含み、堀之内・加曽利Ｂ式を主とする馬蹄形貝塚（東西約100ｍ・南北約100ｍ）で、明治44年以来知られた大貝塚であったが、昭和30年代の住宅団地造成によって、発掘調査されることなく破壊された（註３）。なお本貝塚の西北西約700ｍのところにある多聞寺貝塚は旧海蝕崖に面する小貝塚で、イボキサゴを主とし、ハマグリ・アサリ・ツメタガイ・サルボウ・シオフキ等を含む。土器型式は不明であるが多分後期であろう。

白旗川は下流で３つに分れるが、市原台地に水源を発するのは本流ともう１つの支流である。本流域では上流の右岸に山倉貝塚があり、左岸にある山倉若宮貝塚と相対する。中流右岸には亥

の海道貝塚がある。また支流の谷奥に南中台貝塚、やや降った右岸に祇園原貝塚が分布する。山倉は標高41～40m、大型馬蹄形貝塚（東西150m・南北150m）として早くから知られ、大正５年発行の『千葉県市原郡誌』には「古き貝殻を多く出す、区民道路修繕若しくは地形固めの際発掘して之を使用す、貝殻中には古代土器破片多し」とある。昭和23年・同43年にそれぞれ局部的な発掘が行なわれ、加曽利ＥⅠ・Ⅱ・堀之内Ⅰ・加曽利Ｂ式期に貝層を伴うことが確認された。貝類は鹹水系のハマグリ・アサリ・シオフキ・イボキサゴを主とし、ウミニナ・バイ・アラムシロ・イボニシ・アカニシ・サルボウ・アカガイ・マガキ・イタボガキ・カガミガイ・オキシジミ・マテガイ・ミルクイ・オオノガイのほか淡水系のカワニナを僅かに含む（註４）。山倉若宮は山倉の分村と見られる小貝塚である。亥の海道は標高約30m、国道297号線によって貝塚の中央部が破壊され、現況は道路の両側に貝層が認められる。ハマグリ・イボキサゴ・アサリ・シオフキ・ツメタガイ・ウミニナ・マガキ・イボニシ等を含む。堀之内・加曽利Ｂ式期を中心とする貝塚であろう。南中台は標高約30mで、本貝塚に関する唯一の記載は上総国分寺台遺跡調査団『東間部多古墳群』昭和49年発行の「国分寺台遺跡地名表」に、「南中ノ台貝塚、縄文中・後期、地点貝塚、1973年調査後破壊」とあるのみで詳しい内容は不明であるが、発掘関係者の言によると、貝層中の土器は堀之内式であったという。祇園原は標高約30m点在馬蹄形貝塚で、昭和23・52・53・57年に発掘された。ハマグリ・イボキサゴが最も多く、アサリ・ツメタガイ・オキシジミ・シオフキ・オオノガイ・アカニシ・ウミニナ・バイ・アラムシロを含み、土器は早期末葉・称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅡ・Ⅲ・安行Ⅰ・Ⅲａ・大洞Ａ式を出土し、称名寺Ⅱ式期に貝ブロックが、堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅡ・Ⅲ・安行Ⅰ式期に貝層が伴う。遺構は大洞Ａ式期を除く各時期のものが発見されたが、特に昭和57年の発掘で安行Ⅲａ式期の竪穴住居址が出土したことが注目される（註５）。

註１　千葉県文化財センター『千葉県文化財センター年報』No.15平成２年
註２　千葉県教育委員会「市原遺跡発掘調査概報」（『千葉県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』）第１輯　昭和24年
註３　「上総市原郡市原村発見の石器時代遺物」（『人類学雑誌』26巻298号）明治44年
註４　山倉貝塚調査団『昭和43年度山倉貝塚調査報告』昭和44年
註５　上総国分寺台発掘調査団・市原市教育委員会『祇園原貝塚』Ⅲ　昭和58年

(3)　養老川沿岸

養老川は延長約75km、清澄山系の北麓にある夷隅郡大多喜町の麻綿原高原に源を発して北流し、市原市域の丘陵・台地地帯を通過し、下流地帯に入ると河谷平野の谷幅を著しく広げる。現河道はこのあたりで大きく蛇行しながら両岸の台地を浸蝕して河岸段丘を作る。最下流は東京湾に開口する尖状三角州地形となり、旧水路とみられる微低地や自然堤防・砂州等が多く見られる。縄

文時代の貝塚や貝ブロックを包含する遺跡はこの河岸段丘に面する台地の縁辺に分布する。

A　養老川右岸の遺跡は山倉天王貝塚・山倉堂谷（やまくらどうやつ）貝塚・西広（さいひろ）貝塚・諏訪台貝塚が知られている。このうち山倉天王と山倉堂谷は南に突き出た標高約50ｍの舌状台地にあって、南北に隣接し、しかも貝層形成の時期はともに中～後期にあると思われることから、むしろ同一集落として捉えることがより妥当であろう。山倉天王は馬蹄形貝塚（東西150ｍ・南北約100ｍ）でハマグリ・イボキサゴを主とし、アサリ・ツメタガイ・シオフキ・アカニシ・ウミニナ・カガミガイ・バイと淡水産のカワニナを僅かに含む純鹹に近い主鹹貝塚で、採集された土器は阿玉台Ⅱ・Ⅲ・勝坂・加曽利ＥⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ・安行Ⅰ・Ⅲｂ式であるが、主体は加曽利Ｅ式から加曽利Ｂ式期までであろう（註１）。山倉堂谷は地点貝塚であるが貝層形成の時期は山倉天王と同一であろう。西広貝塚は山倉貝塚の西側の谷をへだてて西南西方約600ｍのところにある点在馬蹄形貝塚で標高42ｍを測る。昭和24・40・47～49（第１次）・55（第２次）・56（第３次）・57（第４次）・58（第５次）・59（第６次）・61～62年（第７次）の発掘調査によって本貝塚集落の約70％の内容がほぼ解明された（平成３年１月現在昭和58年－第５次調査以後の報告書は未刊である）。発掘によって判明した内容を要約すると、

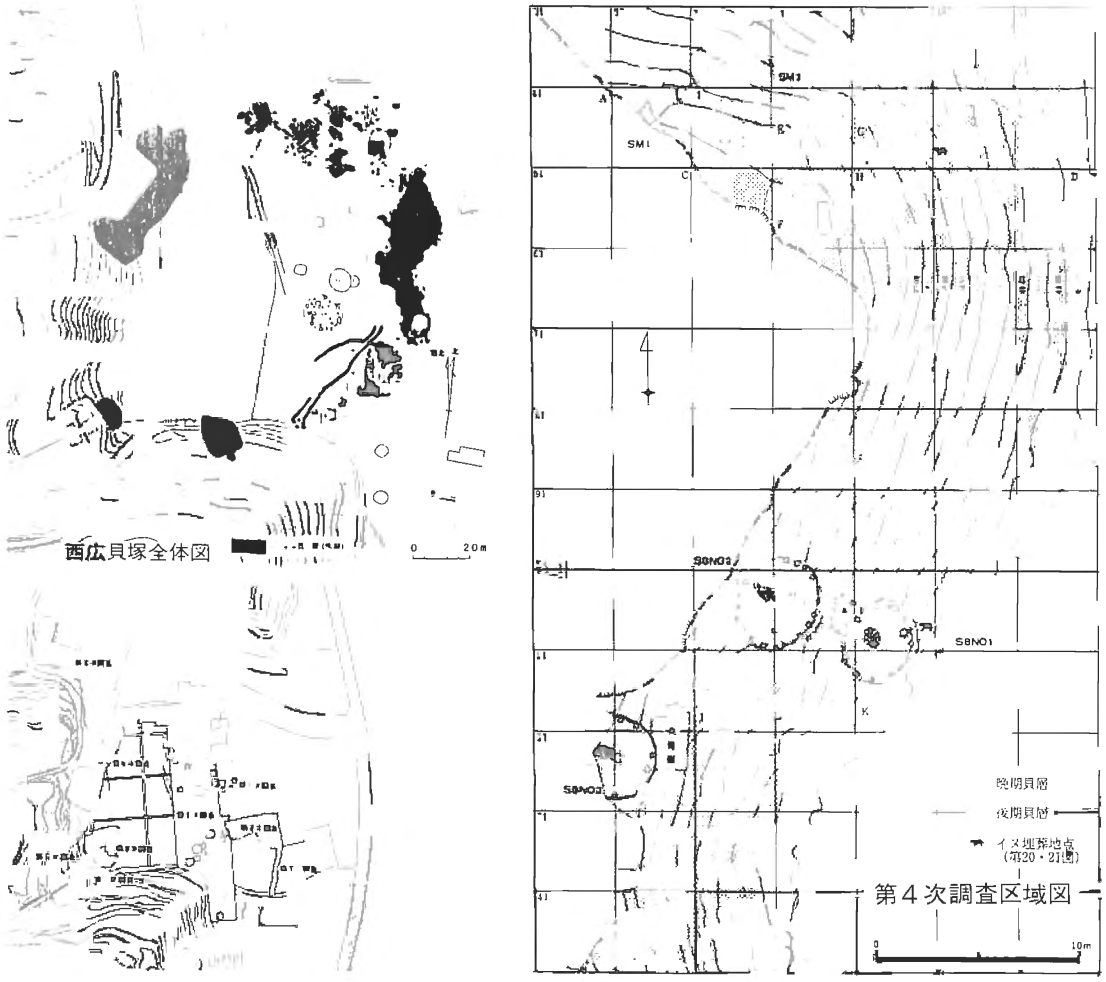
①点在馬蹄形貝塚の規模は東西約130ｍ・南北約150ｍで、貝層や貝ブロックは東側と北側にある台地に堆積するものと、西側と南側の斜面部に堆積するものとに大別され、この間にある中央広場は凹地となっている。

②台地に堆積する貝層・貝ブロックの時期は加曽利ＥⅣ式期に始まり、称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ・曽谷・安行Ⅰ・Ⅱ式期までである。この貝層の厚さは約30～50㎝で、その下にこれらの時期の竪穴住居址や多数のピットが発見される。一方斜面部に堆積する時期は堀之内Ⅰ式期に始まり、同Ⅱ・加曽利ＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ・曽谷・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲａ・Ⅲｂ・前浦式期までである。この貝層の厚さは２ｍ近い部分もある。このうち、安行Ⅲａ・Ⅲｂ・前浦式期の貝層は西側斜面部の北端に帯状に伸びるものと、ブロック状のものとがある。これらは小規模で、ハマグリを主とし僅かにヤマトシジミ・カワニナ・ヤマタニシを含む。西側斜面部の貝層の下には後期と思われる竪穴住居址３軒と多数のピットが発見されたが、晩期のものは見当らない。次に本貝層の貝類の堆積量を見ると、堀之内Ⅰ式のものが最も多く且つ広く分布し、続いて加曽利ＢⅡ・Ⅲ式期が比較的多く、堀之内Ⅱ・加曽利ＢⅠ・曽谷・安行Ⅰ・Ⅱ式期は少なく、晩期の貝層では前浦式のものが主体を占め、安行Ⅲａ・Ⅲｂ式期のものは少ない。南側斜面部の貝層発掘は昭和58年（第５次）・昭和59年（第６次）に一部実施されたが、詳細な報告は刊行されていない。ただ米田耕之助氏によれば、第５次に前広神社裏側に於て加曽利Ｂ式期の竪穴住居址１軒と時期不明の粘土採掘坑を思わせる小竪穴状遺構があり、第６次にその南側で堀之内Ⅱ式期の竪穴住居址が発掘されたという（貝層の内容については触れていない）（註２）。

③西広貝塚の全域に分布する貝層・貝ブロックの堆積状況を概観すると、中期末葉の加曽利Ｅ

Ⅳ式期から後期の貝の組成はハマグリが最も多く、イボキサゴがこれに次ぎ、ツメタガイ・シオフキ・アサリ・アカニシ・カガミガイが目立つ。その他ではウミニナ・バイ・アラムシロ・キセルガイ・ツノガイ・サルボウ・マガキ・イタヤガイ・オキシジミ・ミルクイ・オオノガイ・マテガイ・バカガイなどの内湾砂泥底・砂底棲のものが絶対多数を占め、汽水産のヤマトシジミ、淡水産のオオケマイマイ・ヒダリマキマイマイなどは希である。晩期では中～大型のハマグリがほとんどで、僅かに汽水産のヤマトシジミと淡水産のカワニナ・ヤマタニシが混入し、他の貝類は全く見当らない。

④貝層の堆積が認められない中央広場の東北部・東部・南西部にそれぞれ次のような遺構があった。東北部では東西3.6m・南北1.4m・深さ65cmの船底形の遺構があって、姥山台Ⅱ・Ⅲ・安行Ⅲb・Ⅲc・Ⅲd・前浦・大洞C_2式期の土器片とともに、土偶破片78・石剣18個が出土し、さらにこの下に人骨4体（男2・女1・不明1）が発見された（保存状態が悪く葬法は不明）。東部では直径11mの範囲内に大形ピット（直径1～1.5m・深さ1.5～2m）が点々とほぼ円形に配置



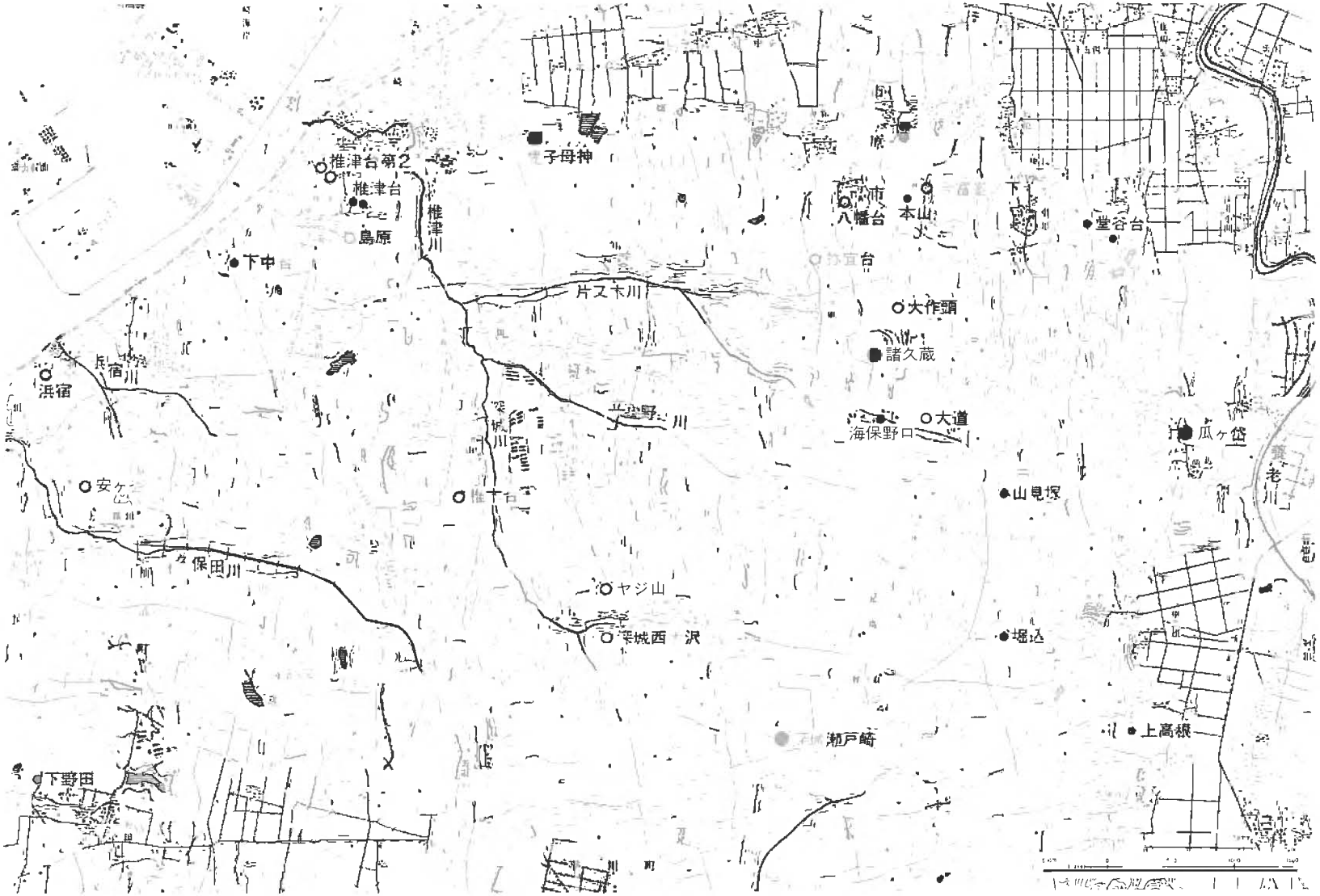
第２図　西広貝塚（米田耕之助氏原図）

される遺構があった。この遺構の床面は軟弱で凹凸があり、焼土が大小12ケ所に分布し、安行Ⅲａ・Ⅲｃ・姥山台Ⅱ・Ⅲ・前浦・大洞C_1・Ａなどの土器片と多量の獣骨・土偶破片８・石剣13などが発見された。南西部では早期末葉の炉穴３・曽谷乃至安行Ⅰ式期と見られる住居址４軒（このうちの１軒から安行Ⅰ式期の異形台付土器が出土）と大小多数のピット群が密集して発掘され、ここからは安行Ⅱ・Ⅲａ・前浦・大洞Ａ・Ａ′式期の土器片と土偶・石剣・土版等の破片が出土した。中央広場の凹地には遺構は全く認められない。

⑤西広貝塚から出土した土器は早期末葉・浮島系・勝坂式・加曽利ＥⅣ式・称名寺式・堀之内Ⅰ・Ⅱ式・加曽利ＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ式・曽谷式・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲａ・Ⅲｂ・Ⅲｃ式・姥山台式・前浦式・大洞Ａ・Ａ′式で、このうち主体となるのは堀之内Ⅰ式から前浦式までである。次に発掘された遺構は早期末葉の炉穴３・中期末葉～晩期に至る大小の土坑多数・後期の竪穴住居址約40軒・晩期前半の祭祀的遺構１乃至２（中央広場北東部と南西部）・集会場的遺構１（中央広場東部）・時期不明の粘土採掘坑と推定される遺構１であって、晩期の住居址と思われるものは発見されていない。遺物で注目すべきものは後～晩期の人骨57体以上・安行Ⅰ式異形台付土器１・土偶破片約140・土版13・有孔円板形土製品50以上・石棒及び石剣60個等である。諏訪台貝塚は市原台地の南西端、標高約25ｍの地点にある小貝塚で、ハマグリ・マガキ・ハイガイなどが多い。昭和62～63年に早期末葉の竪穴住居址６軒・炉穴49・土坑35基を発掘した。右住居址はいずれも梯形で、床面の壁ぎわに多数の柱穴をめぐらし、中央付近に焼土を含む炉址が１～２個ある。このうちの１軒は貝ブロックを伴う大型で、長軸長13.5ｍ・深さ約１ｍを測る。なお本貝塚の東側に近接して貝層・貝ブロックを全く伴わない関山式期の竪穴住居址20数軒からなる集落址が発見されている（註３）。

註１　米田耕之助「養老川流域の縄文時代遺跡」（『伊知波良』２）昭和54年
　　千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年
註２　別表『西広』主要文献
註３『市原市文化財センター遺跡発表要旨昭和63年度』平成元年

Ｂ　養老川左岸に分布する貝塚・貝ブロック遺跡は姉ケ崎台地を刻む樹枝状の小谷に面して分布する。千葉県文化財センターが昭和62年に作製した遺跡分布地図によれば、上高根・堀込・瓜ケ岱・堂谷台・今富峯ノ下・本山・大作頭・諸久蔵・八幡台・祢宜台・鬼子母神の諸貝塚を記載している。右のうち今富峯ノ下・大作頭・八幡台・祢宜台の４貝塚については、昭和63年に市原市教育委員会が作製した遺跡分布図には、貝塚として記載されていない（註１）。また平成元年の大作頭（おおさくがしら）に於ける発掘調査の報告によれば、「先土器時代石器群２ケ所・縄文早期炉穴97基・土坑30基・中期竪穴住居址２軒」が発見され、縄文時代の焼礫があったとあるのみで、貝塚の有無についての記述はない（註２）。筆者はこれらの遺跡について一応の踏査を



第３図　養老川左岸・椎津川・浜宿川・久保田川沿岸の貝塚・貝ブロック遺跡分布図

試みたが、少なくとも縄文時代の貝塚であるという確認は得られなかった。しかし本稿付属の付図にはこれらの遺跡の全てを記載することとして、今後の検討課題とする。

上高根は標高約45mの東方に突き出た小台地の3ケ所に貝塚が点在し、昭和36年一部発掘された。ハマグリ・イボキサゴが最も多く、アサリ・ツメタガイ・サルボウ・オキシジミ・シオフキ・マテガイ・オオノガイ・アカニシ・ウミニナ・マテガイ・希にアワビの他、淡水産のイシガイ・カワニナなどを含む。土器は加曽利ＥⅠ・Ⅱ・Ⅲ・称名寺Ⅰ・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ・安行Ⅰ式を出土するが、発掘地点では堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ式期に伴う貝層があった。堀込（ほっこみ）は東から姉ケ崎台地の西方に侵入した谷奥に面し、標高約55mで、ハマグリ・アサリ・イボキサゴ・ツメタガイ・サルボウ・オオノガイ・アカニシを含み、加曽利Ｅ・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利Ｂ・安行式土器を出土する地点貝塚で、鯨の脊椎骨に加工を施したものがあった。瓜ケ岱（うりがだい）は姉ケ崎台地の北側にある小谷の谷奥に面する馬蹄形貝塚で、標高約45mを測る。シオフキ・イボキサゴ・アカニシ・ハマグリ・アサリ・ツメタガイ・サルボウ・ハイガイ・シオフキ・ウミニナ・カガミガイ・アラムシロを含み、堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅠ・Ⅱ式土器を出土する。堂谷台（どうやつだい）は分目（わんめ）貝塚とも呼ばれ、養老川を眼下に見おろす標高約25～40mの舌状台地に点在する中期の貝塚で、ハマグリ・アサリ・シオフキ・イボキサゴなどを主とする。本山と諸久蔵は谷口を同じくする谷津田に面するが、前者は谷の中ほどの東側にあって、標高約40mの地点貝塚でハマグリ・アサリを採集するが、貝層形成の時期は不明である。後者は谷奥にある大型馬蹄形貝塚（東西120m・南北100m）で標高は約65mである。ハマグリ・イボキサゴを主とし、アサリ・ツメタガイ・サルボウ・シオフキ・オオノガイ・アカニシ・ウミニナ・カガミガイと汽水産のヤマトシジミを少量含み、加曽利ＥⅡ・Ⅲ・Ⅳ・称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ・安行Ⅰ式を出土する。鬼子母神は姉ケ崎台貝塚とも呼ばれ、養老川最下流域の平坦な台地上にあって、標高約35mを測り、東側に小谷がある。大型点在馬蹄形貝塚（東西60m・南北130m）で、ハマグリ・アサリ・ツメタガイ・サルボウ・ハイガイ・シオフキ・アカニシ・イボキサゴ・ウミニナ・カガミガイ・バイ・イボニシ・アラムシロを含み、茅山・勝坂・加曽利Ｅ・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅡ・Ⅲ式を出土する。

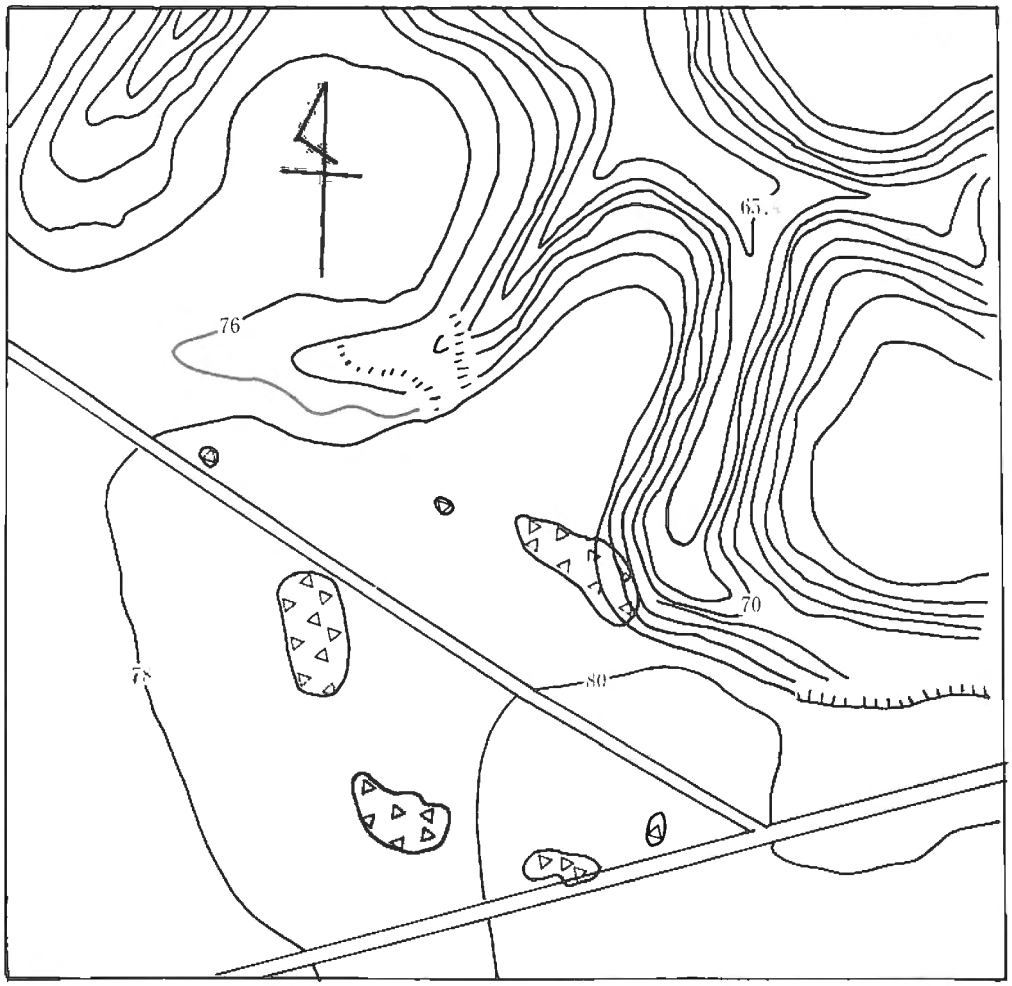
註1　千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』3　昭和62年
　　市原市教育委員会『市原市埋蔵文化財分布地図北部編』昭和63年
註2　『千葉県文化財センター年報』No.15平成2年

(4)　椎津川・浜宿川・久保田川沿岸

姉ケ崎台地を開析して西方に流れ、東京湾に注ぐこれらの川の縁辺台地に所在する貝塚乃至貝ブロック遺跡として、これまでに記録されているものを川別に挙げると、椎津川水系では山見塚・大道・海保野[1]・深城瀬戸崎・深城西大沢・ヤジ山・椎木台・島原・椎津台・椎津台第2があり、

浜宿川では浜宿、久保田川では安ケ谷がある。

右のうち大道（だいどう）は千葉県文化財センターの『埋蔵文化財分布地図』（昭和62年）では「貝塚・包蔵地・縄文土器」とあるが、市原市文化財センター『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』（昭和62年）所載の「周辺遺跡一覧表」に「縄文早期、昭和61年度市原市文化財センター調査」とあり、市原市教育委員会『文化財分布地図北部編』（昭和63年）には「包蔵地・縄文・道路建設の為一部調査」とあって、縄文貝塚とは書かれていない。深城西大沢については、前記千葉県文化財分布地図に「深城字西大沢・滝ノ下」として「貝塚・包蔵地・縄文土器」とあるが、前記市原市教育委員会の分布地図北部編には全く記載されず、筆者の踏査でも確認出来ない。ヤジ山についても千葉県文化財センターの分布地図には「貝塚・包蔵地・縄文土器・土師器」などとあるが、同センターが平成２年に発掘した報告によれば、「炉穴15基・土坑６基（縄文早期）、縄文土器（草創期・早期・後期）」などとあり（註１）、市原市教育委員会の分布地図北



第４図　深城瀬戸崎貝塚貝層分布図
（市原市教育委員会作製に加筆）

部編には「包蔵地・縄文土器・土師器」とあって、貝塚とは記されていない。また椎木台については、君津郡市文化財センター『清水川遺跡発掘調査報告書』（昭和58年）の「周辺遺跡地名表」に「貝塚・縄文」が唯一の記録と思われるが、このあたりは住宅団地造成によって破壊されたのであろうか。島原についても、千葉県文化財センターの分布地図では「包蔵地・貝塚・縄文・古墳・奈良・平安」とあるが、市原市教育委員会の分布地図では「包蔵地・縄文～平安」とあり、貝塚とは記されていない。このように前記の遺跡が縄文時代の貝塚か否かの問題は今後にのこされた検討課題であるが、本稿付属の付図には記載することにした。

山見塚は椎津川の支流片又木川（仮称）の水源にある。標高78ｍを測り、北側は養老川の方向に開口する谷奥に近く、南東側は姉ケ崎台地の分水嶺となる。昭和60年のＡ・Ｂ両地点における遺跡確認調査によると、早期の集石遺構１・後期の竪穴住居址19、土坑６、貝ブロック14ケ所が検出された。出土した土器は早期撚糸文系・早期条痕文系・鵜ケ島台・茅山・黒浜・阿玉台・加曽利Ｅ・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅠ式で、貝ブロックを伴う遺構はすべて堀之内Ⅰ・Ⅱ式期（Ａ地点）である。貝はイボキサゴ・ハマグリ・アサリを主とし、ウミニナ・ツメタガイ・アカニシ・アラムシロ・バイ・サルボウ・マガキ・カガミガイ・オキシジミ・バカガイ・シオフキ・マテガイ・オオノガイなどの内湾性のものと、外洋性のスガイ・フジツボ・ナミマガシワ、汽水性のヤマトシジミ、陸産のキセルガイモドキ・ホソオカチョウジ・オカチョウジを含むが、全体的には内湾の潮間帯に棲むものが大部分である（註２）。海保野口は山見塚から西北西方へ1,120ｍへだてた片又木川右岸にあって、養老川左岸の方向に開口する小谷の谷奥にも近い標高65～70ｍの台地上にある。平成元年に行なわれた千葉県文化財センターの発掘調査によると、早期炉穴198、陥穴６、中期竪穴住居址４、小竪穴１、埋甕３、貝ブロック１ケ所とある。（貝の種類については記載がない）（註３）。深城瀬戸崎（別名深城）は椎津川の支流深城川（仮称）の水源にあって標高73～80ｍを測り、東側は姉ケ崎台地の分水嶺となり、その東に小櫃川の支流松川の支谷が望まれる。未発掘であるが、遺跡の測量とボーリング調査によると、東西約100ｍ・南北約120ｍの範囲に７ケ所の貝塚が馬蹄形に点在する。貝層の厚さは約30～40cmと推察される。ハマグリ・サルボウ・イボキサゴを主とし、アカニシ・ツメタガイ・バイ・カガミガイ・シオフキ・アサリ・マガキを含み、堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ式を出土する（註４）。椎津台は椎津川の下流左岸の小谷を南東に控えた台地にある点在貝塚と思われるが、市原市教育委員会の分布地図北部編（昭和63年）では「地点貝塚・縄文土器・土師器・アサリ・サルボウ」と記載する。椎津台第２は椎津台を乗せる台地の西に突き出た所にあって、標高約30ｍである。この遺跡の周辺一体は中世に構築した城跡として知られ、天文３年（1534）・天文21年（1552）には激しい攻防戦が展開された。平成元年に行った椎津城跡の局部的な発掘調査によると、埋蔵文化財の破壊はかなり進んでいたようである（註５）。縄文時代の貝塚はこの城跡の西部にあると推定されているが、調査は不充分であるために貝の種類・土器・貝塚の範囲などは明確でない。下中台貝塚は椎津台城跡を乗せる台地の西側にある小谷を越えた台地上にある。ハマグリ・アサリ・サルボウなどを

No. 通しNo.	No. 市町村別	県埋文分布地図No.	貝層・貝ブロックを含む遺跡	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	土器の型式
204	72	47－992	六通	大金沢町字六通					?	堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅠ・Ⅱ・Ⅲ・曽谷・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa・Ⅲc
205	73	47－1027	野田（野田小谷）	誉田町一丁目小谷・一里塚南						阿玉台・加曽利EⅢ・加曽利B
218	86		大覚寺山脇	生実町大覚寺脇						堀之内・加曽利B
219	87	47－987	森台（南生実台）	南生実町南生実台973						鵜ケ島台・茅山・堀之内・加曽利B
220	88	47－867	鎌取場台	鎌取町鎌取場台						堀之内・加曽利B
221	89	47－874	南二重堀	生実町2857－1他						稲荷台・黒浜・浮島・阿玉台・加曽利EⅠ・Ⅱ・堀之内
222	90	47－857	上赤塚	南生実町上赤塚						茅山・加曽利E・堀之内・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ
223	91	47－865	有吉北（日照田）	有吉町730他						茅山・中峠・阿玉台・加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・称名寺・堀之内・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ
224	92	47－873	大井戸作	有吉町駒見台大井戸作						加曽利E・堀之内・加曽利B
225	93	47－1226	神門	南生町神門740他						鵜ケ島台・茅山・花積下層関山Ⅰ・Ⅱ・黒浜・諸磯a・b・浮島Ⅰ・十二菩提・荒海
226	94	47－871	有吉南（有吉宮前・有吉）	有吉町481他			?			加曽利EⅠ・Ⅱ・称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利B
227	95	47－875	有吉城跡	有吉町有吉城址	?					茅山上層
228	96	47－1012	小金沢（堂面）	小金沢町929－4他						茅山・黒浜・加曽利EⅣ・堀之内Ⅰ・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ
229	97	47－995	木戸作（椎名崎）	椎名崎町859他						加曽利E・称名寺・堀之内Ⅰ・加曽利B
230	98	47－1023	六通金山	大金沢町480他						茅山・加曽利EⅢ・Ⅳ

（太線は貝層・貝ブロックの形成時期推定）

規　模	備　考	主　要　文　献
馬蹄形	保存 標高40～47m	千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ　昭和51年 千葉県文化財センター「六通貝塚貝層範囲確認調査」『研究連絡誌』18号　昭和61年 「千葉県文化財センター年報」11　昭和61年
点在	消滅	千葉市教育委員会『千葉市史史料編』Ⅰ　昭和51年 千葉市教育委員会『千葉市埋蔵文化財分布地図』　昭和59年
地点	消滅	千葉市教育委員会『千葉市史史料編』　昭和51年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(2)　昭和61年
馬蹄形	一部消滅	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
点在		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(2)　昭和61年
貝ブロック 点在	発掘	千葉県文化財センター「南二重堀遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』12）　昭和58年
馬蹄形	保存	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(2)　昭和61年
点在馬蹄形	発掘 半壊	上守秀明・小宮孟「千葉県千葉市有吉北貝塚の調査」（『日本考古学協会第53回総会研究発表要旨』）　昭和62年
点在	消滅	伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』　昭和34年
地点	発掘 標高6.5m 約½残存	金丸誠・麻生正信・服部哲則「低湿地遺跡の水浸木質遺物の取り上げ」（千葉県文化財センター『研究連絡誌』20号）　昭和62年 千葉県文化財センター『千葉市浜野川遺跡群』　昭和63年 寺門義範「神門遺跡の調査」（千葉市文化財調査協会『浜野川神門遺跡現地説明会資料』）　昭和63年 千葉県文化財センター『千葉市浜野川神門遺跡』　平成元年
馬蹄形	保存 一部消滅	伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』　昭和34年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(2)　昭和61年
貝ブロック 点在	発掘	千葉県文化財センター　馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』15）　昭和59年
点在馬蹄形	完掘 消滅	千葉県文化財センター　小金沢貝塚」（『千葉東南部ニュータウン』10）　昭和57年
点在馬蹄形	完掘 消滅	千葉県文化財センター「木戸作遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』2・7）　昭和50・54年
貝ブロック 点在	発掘	千葉県文化財センター「六通金山遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』11）　昭和56年

No. 通しNo.	No. 市町村別	県埋文分布地図No.	貝層・貝ブロックを含む遺跡	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	土器の型式
231	99	47－1022	大膳野北	大金沢町543－2他						茅山上層・黒浜・諸磯a・b・浮島・興津・阿玉台・加曽利EⅡ・Ⅲ・加曽利BⅡ・千網・大洞A′
232	100	47－1080	大膳野南（長堀）	大金沢町オケラ台						諸磯・加曽利E・堀之内・加曽利B
233	101	47－1077	杉ノ台	中西町中西宮山						加曽利B
306	114	47－1028	大膳野北	大膳野町大膳野						加曽利E・堀之内・加曽利B
312	115		高沢	生実町2871－1他						早期前葉・茅山下層・前期前半・浮島・諸磯・阿玉台・勝坂・加曽利EⅡ・Ⅲ・堀之内・加曽利B・荒海

市原市

No. 通しNo.	No. 市町村別	県埋文分布地図No.	貝層・貝ブロックを含む遺跡	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	土器の型式
241	1	47－649	西鹿ノ原	番場・鹿ノ原						阿玉台・加曽利E
242	2	47－686－1	草刈（下切付・扇ケ谷）	草刈字下切付他						早期・前期・勝坂・阿玉台・曽利・大木8a・中峠・加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ
243	3	47－643	多竜台	喜多字多竜台695他						加曽利E・堀之内・加曽利B・安行Ⅰ
244	4	47－599	手永	菊間字手永2137他						堀之内・加曽利B・安行
245	5	47－575	門前	門前2－211他						加曽利E・堀之内・加曽利B

規　模	備　考	主　要　文　献
貝ブロック 点　在	発　掘	千葉県文化財センター『千葉市大膳野北遺跡』　昭和57年 千葉県文化財センター「大膳野北遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』16）昭和60年
点在馬蹄形	保　存	伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』　昭和34年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(2)　昭和61年
地　点	消　滅	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(2)　昭和61年
点　在		伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』　昭和34年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(2)　昭和61年
貝ブロック 点　在	完　掘 消　滅	千葉県文化財センター「高沢遺跡」（『千葉東南部ニュータウン』17）平成2年

規　模	備　考	主　要　文　献
地　点		千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
点在馬蹄形	発掘調査継続中	千葉県文化財センター「草刈遺跡確認調査の概要」（『千原台ニュータウン』Ⅰ）　昭和55年 千葉県文化財センター「千葉急行線」（『千葉県文化財センター年報』No.8）昭和58年 市原市文化財センター『草刈遺跡』　昭和60年 千葉県文化財センター「草刈遺跡（B区）」（『千原台ニュータウン』Ⅲ）昭和61年 千葉県文化財センター『市原市草刈貝塚』　平成2年
馬蹄形	一部消滅	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
馬蹄形	発　掘 消　滅	市原市文化財研究協議会『市原市遺跡分布図』　昭和46年 鷹野光行「市原市菊間手永貝塚採集の土器片」（『伊知波良』3）　昭和55年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年 市原市文化財センター『市原市文化財センター年報　昭和57・58年度』　昭和60年
馬蹄形	消　滅	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年

No. 通しNo.	No. 市町村別	県埋文分布地図No.	貝層・貝ブロックを含む遺跡	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	土器の型式
246	6	46－585	多聞寺	郡本５－29						縄文
247	7	52－295	烏堀込	能満字味噌柵 2133－１他						阿玉台・加曽利ＥⅠ・Ⅱ・Ⅲ・堀之内Ⅰ
248	8	52－337	能満分区	能満字分区貝殻塚						加曽利ＥⅣ・称名寺Ⅰ・Ⅱ・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ・曽谷・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
249	9	52－291	山倉分廻（分廻）	能満字下中貝						勝坂・加曽利Ｅ・後期
250	10		小田部	小田部字貝殻畑						加曽利Ｅ・堀之内・加曽利Ｂ・安行Ⅰ・Ⅱ
251	11	51－561－8	南中台	惣社字南中台						縄文中期・後期
252	12	51－561－19	祇園原	根田字祇園原473他						早期末・称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅡ・Ⅲ・安行Ⅰ・Ⅲａ・大洞Ａ
253	13	52－263	土器石（武士）（瓦石）	福増字向田～勝間字土器石						夏島・田戸下層・子母口・茅山・前期・加曽利ＥⅢ・Ⅳ・称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅠ・Ⅱ・曽谷・安行Ⅰ・Ⅱ・千網・荒海・大洞Ａ・氷Ⅰ・樫王
254	14	52－286	山倉天王	山倉字西猿子谷						阿玉台Ⅱ・Ⅲ・勝坂・加曽利ＥⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利ＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ・安行Ⅰ・Ⅲｂ
255	15	52－345	山倉堂谷	山倉字堂谷						中期・後期
256	16	52－340	山倉	山倉字南貝塚						稲荷台・茅山・勝坂・阿玉台・加曽利ＥⅠ・Ⅱ・堀之内Ⅰ・加曽利Ｂ・安行

規　模	備　考	主　要　文　献
地　点	半　壊	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
点　在	一部発掘	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年 市原市文化財センター『市原市文化財センター年報 昭和60年度』　昭和61年
馬蹄形	標高約60m	米田耕之助「養老川流域の縄文時代遺跡」（『伊知波良』２）　昭和54年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
地　点	一部発掘 消　滅	千葉県教育委員会「市原遺跡発掘調査概報」（『千葉県史跡名勝天然紀念物調査報告書』第１輯）　昭和24年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)　昭和62年
地　点	消　滅	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
地　点	発　掘 消　滅	上総国分寺台遺跡調査団『東間部多古墳群』の「国分寺台遺跡地名表」　昭和49年に所載 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
点在馬蹄形	発　掘	千葉県教育委員会「市原遺跡発掘調査概報」（『千葉県史跡名勝天然紀念物調査報告書』第１輯）　昭和24年 上総国分寺台遺跡調査団「祇園原貝塚」（『上総国分寺台発掘調査概要』Ⅴ）昭和53年 上総国分寺台遺跡調査団「祇園原貝塚Ⅱ」（『上総国分寺台発掘調査概要』Ⅵ）昭和54年 上総国分寺台遺跡調査団「祇園原貝塚Ⅲ」（『上総国分寺台発掘調査概要』Ⅺ）昭和58年
点　在	標高75～78m 発　掘 一部残存	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年 千葉県文化財連絡協議会『昭和63年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』昭和63年 千葉県文化財センター『研究連絡誌』25号　平成元年 『千葉県文化財センター年報』No.13　平成元年 『千葉県文化財センター年報』No.14　平成元年 『千葉県文化財センター年報』No.15　平成２年
馬蹄形	一部破壊	米田耕之助「養老川流域の縄文時代遺跡」（『伊知波良』２）　昭和54年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
地　点		市原市教育委員会『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図北部編』　昭和63年
馬蹄形	一部発掘 保　存	千葉県教育委員会「市原遺跡発掘調査概報」（『千葉県史跡名勝天然紀念物調査報告書』第１輯）　昭和24年 山倉貝塚調査団『市原市山倉貝塚調査報告』　昭和44年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年 市原市教育委員会『市原市埋蔵文化財分布調査カード』　昭和63年

No. 通しNo.	市町村別	県埋文分布地図No.	貝層・貝ブロックを含む遺跡	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	土器の型式
257	17	52－561－25	西広	西広字上ノ原						早期末・浮島・勝坂・加曽利EⅣ・称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅠ・Ⅱ・Ⅲ・曽谷・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa・Ⅲb・Ⅲc・姥山台・前浦・大洞A・A′
258	18	51－561－12	諏訪台	村上902他						早期末・関山
259	19	51－423	上高根	上高根字塚越884他						加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ・称名寺Ⅰ・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅠ・Ⅱ・Ⅲ・安行Ⅰ
260	20	51－425	堀込	中高根字堀込						加曽利E・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利B・安行
261	21	51－364	瓜ケ岱	高坂字北瓜ケ岱						堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅠ・Ⅱ
262	22	51－403	堂谷台（分目）	宮原字堂谷・安良久						中期
263	23	51－394	今富峯ノ下	今富字峯ノ下						縄文
264	24	51－393	本山	今富字本山						縄文
265	25	51－409	大作頭	今富字大作頭						縄文
266	26	51－519	八幡台	海保字八幡台						縄文
267	27	51－503	鬼子母神（姉崎台）	姉崎字台ノ東						田戸下層・茅山・勝坂・加曽利E・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅡ・Ⅲ
268	28	51－420	山見塚	立野字山見塚301－1他						早期撚糸文系・鵜ケ島台・茅山・関山・黒浜・阿玉台・加曽利E・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅠ

規　模	備　考	主　要　文　献
点在馬蹄形	発　掘	千葉県教育委員会「市原遺跡発掘調査概報」（『千葉県史跡名勝天然紀念物調査報告書　第1輯）　昭和24年 市原市教育委員会『千葉県市原市西広貝塚』　昭和40年 上総国分寺台遺跡調査団『西広貝塚』　昭和52年 上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会『西広貝塚第2次調査』　昭和56年 上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会『西広貝塚第3次調査』　昭和57年 上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会『西広貝塚第4次調査』　昭和58年 米田耕之助「西広貝塚の調査」（『第4回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』）　平成元年
地　点	発　掘 一部残存	『市原市文化財センター年報　昭和60年度』　昭和61年 『昭和61年度千葉県遺跡調査研究発表会』　昭和61年 『市原市文化財センター遺跡発表要旨　昭和63年度』　平成元年
点　在	一部発掘	市原市教育委員会『市原市文化財要覧』　昭和48年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
地　点	一部破壊	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
馬蹄形	一部破壊	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
点　在		市原市教育委員会『市原市文化財分布調査カード』　昭和46年
		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)　昭和62年
		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)　昭和62年 市原市教育委員会『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図北部編』　昭和63年
	標高65m 平成元年 千葉県文化財センター 発　掘	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)　昭和62年 『千葉県文化財センター年報』No.15　平成2年
		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)　昭和62年
点在馬蹄形	一部破壊	伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』　昭和34年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年 市原市教育委員会『市原市埋蔵文化財分布調査カード』　昭和63年
貝ブロック 点　在	標高78m 一部発掘 保　存	沼沢豊「各都道府県の動向―千葉県―」（日本考古学協会『日本考古学年報』38）　昭和60年 『市原市文化財センター年報　昭和60年度』　昭和61年 市原市文化財センター『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』　昭和62年

No. 通しNo.	No. 市町村別	県埋文分布地図No.	貝層・貝ブロックを含む遺跡	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	土器の型式
269	29	51－413	大道	今富字大道						縄文
270	30	51－410	諸久蔵	海保字諸久蔵						加曽利EⅡ・Ⅲ・Ⅳ・称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅠ・Ⅱ・Ⅲ・安行Ⅰ
271	31	51－482	島原	椎津字島原・日の宮						縄文
272	32	51－484	椎津台	椎津字尾崎竹の越						縄文
273	33	51－490	椎津台第二	椎津字外郭						縄文
274	34	51－445	ヤジ山	深城字隠田・ヤジ山						縄文
275	35		深城（深城瀬戸崎）	深城字瀬戸崎725－1他						堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅠ・Ⅱ・Ⅲ
276	36	51－473	下中台	椎津字下中台						縄文
307	37	47－598	福寿院	菊間字深道						縄文
308	38	47－602	北野谷	菊間字北野谷小字貝塚台						縄文
309	39	47－596	八幡神社（袖ケ台）	菊間字雲ノ境						縄文
310	40	47－597	徳永	菊間字徳永						縄文
311	41	47－610	辰巳台	大廐字辰巳原他						縄文
313	42		草刈六之台	草刈字六之台1308他						茅山
314	43		大廐細野	大廐字細野						縄文

規模	備考	主要文献
	昭和61年度市原市文化財センター一部調査	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3) 昭和62年 市原市文化財センター『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』 昭和62年の「周辺遺跡一覧表」所載 市原市教育委員会『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図北部編』 昭和63年
馬蹄形	標高約65m	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』 昭和58年
		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3) 昭和62年
点在	ほとんど消滅	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』 昭和58年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3) 昭和62年 市原市教育委員会『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図北部編』 昭和63年
点在	ほとんど消滅	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3) 昭和62年 市原市教育委員会『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図北部編』 昭和63年
	標高68m 平成2年千葉県文化財センター発掘	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3) 昭和62年 『千葉県文化財センター年報』No.15 平成2年
点在馬蹄形	標高70～80m	山田常雄「東瀬戸崎貝塚」（千葉県立上総博物館『研究員紀要』第1集）昭和52年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』 昭和58年 市原市教育委員会『市原市埋蔵文化財調査カード』 昭和63年
点在	一部破壊	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』 昭和58年 市原市教育委員会『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図北部編』 昭和63年
地点	消滅	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3) 昭和62年
地点	消滅	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3) 昭和62年
地点		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3) 昭和62年 市原市教育委員会『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図北部編』 昭和63年
地点		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3) 昭和62年
点在	消滅	市原市辰巳ケ原遺跡調査会『辰巳ケ原遺跡発掘調査報告』 昭和58年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3) 昭和62年
貝ブロック点在	発掘	『千葉県文化財センター年報』No.13 平成元年
地点		市原市教育委員会『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図北部編』 昭和63年

No. 通しNo.	No. 市町村別	県埋文分布地図No.	貝層・貝ブロックを含む遺跡	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	土器の型式
315	44		実信	菊間字実信860－1他						中期後半～後期初頭・後期後半・晩期末葉
316	45		亥ノ海道	山田橋字亥ノ海道						加曽利E・称名寺Ⅱ・堀之内・加曽利B
317	46		山倉若宮	山倉字若宮						縄文
318	47		小谷吹上	小田部字小谷吹上						加曽利E
319	48	51－517	祢宜台	海保字祢宜台						縄文
320	49	51－411	海保野口	海保字野口1193－1他						中期
321	50	51－443	深城西大沢	深城字西大沢・滝ノ下						縄文
322	51		椎木台	姉崎字椎木台						縄文

君津郡袖ケ浦町

No. 通しNo.	No. 市町村別	県埋文分布地図No.	貝層・貝ブロックを含む遺跡	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	土器の型式
277	1	51－10	浜宿	久保田字浜宿						縄文
278	2	51－349	安ケ谷	久保田字安ケ谷						縄文
281	5	51－406	下野田	野田字下野田						縄文

規　模	備　考	主　要　文　献
地　点	発　掘 標高約4.8m	『千葉県文化財センター年報』No.15　平成２年
点　在	一部残存	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』　昭和58年
地　点		市原市教育委員会『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図北部編』　昭和63年
貝ブロック	一部発掘	能満小田部線埋蔵文化財発掘調査団『小田部小谷吹上遺跡』　昭和54年
		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』３　昭和62年
貝ブロック	標高65～70m 発　掘	『千葉県文化財センター年報』No.15　平成２年
		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)　昭和62年
		君津郡市文化財センター『清水川台遺跡発掘調査報告書』　昭和58年の「周辺遺跡地名表」所載 市原市文化財センター『片又木遺跡』　昭和59年所載

規　模	備　考	主　要　文　献
地　点		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)　昭和62年
		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)　昭和62年
		伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』　昭和34年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)　昭和62年

含み、早期の土器を採集するとあるが、貝層形成の時期は不明である（註６）。浜宿は浜宿川の左岸にあり、安ケ谷（やすがやつ）は久保田川の中流右岸にあるが、いずれも内容は不明である。最後に下野田貝塚は姉ケ崎台地の南側にあって、君津郡袖ケ浦町の沖積低地を東から西に流れて東京湾に注ぐ浮戸川に向って開口するやや大きな谷の上流域に位置し、標高約30ｍを測る貝塚であるが、その内容もまた明らかでない。

註１　『千葉県文化財センター年報』No. 15平成２年
註２　市原市文化財センター『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』昭和62年
註３　『千葉県文化財センター年報』No. 15平成２年
註４　山田常雄「市原市東瀬戸崎貝塚」（千葉県立上総博物館『研究員紀要』第１集）昭和52年
　　市原市教育委員会『市原市埋蔵文化財調査カード』昭和63年
註５　千葉県文化財保護協会「椎津城跡・大堀城跡発掘調査報告」（『千葉県中近世城跡研究調査報告書』10集）平成２年
註６　市原市教育委員会『市原市埋蔵文化財分布地図北部編』昭和63年

（千葉市文化財保護審議委員会会長）